

# この「道」をひらく。

そこにある  
プロフェッショナル  
マインド

溪仁会グループを形作っているもの、動かしているもの。  
それは医療人としてのスキルとハートをもった“プロフェッショナル”。  
彼らはいま、何を思い、どこへ向かっているのか。  
変革の精神でそれぞれの道をひらく、職員たちの物語を紹介します。

## 家庭医を育てるという新しいビジョン。 日本の医療を救う挑戦が始まる。

家庭医、と聞いてピンと来る人はまだ少ない。症状や治療法、年齢や性別に限らず、あらゆる初期診療を受け持つのが家庭医だ。欧米では家庭医療専門のトレーニングを積んだ医師が定着しているが、日本でも医師不足を解消する存在として、最近注目されている。この家庭医の育成拠点にもなる「手稲家庭医療クリニック」が、今秋手稲区に誕生した。

手稲渓仁会病院の臨床研修部では、2008年に家庭医療コースを新設。指導医として家庭医の育成を担当するのが、米国家庭医療学専門医の資格を持つ小嶋一医師だ。

「最初から家庭医をめざしたわけではなく、研修医時代に経験した離島での医療が転機になりました。小さな島で住民一人ひとりの暮らしと深く接するうち、地域に根ざした医療の魅力を知った。家庭医療の先進地であるアメリカで専門教育を受けた小嶋医師は、やがて日本での家庭医育成をめざすようになる。

帰国した小嶋医師が、同じビジョンを持つ星哲哉医師とともに根を降ろしたのが、手稲渓仁会病院だった。「日本全国から誘いがありました。北海道は複合的な要素を持つ地域であること、また手稲渓仁会病院が研修医育成に熱心なこと、地域医療連携など新しいことにチャレンジする組織風土があることに可能性を感じ、ここで家庭医育成に取り組もうと決めました」

札幌市で初となる家庭医療クリニックは、1階に外来診療室と訪問看護ステーション、2階に終末癌患者のための病棟が設けられている。外来診療は内科のほか、小児科と産婦人科も対象にしている。また、在宅医療にもウエイブを置き、家族での療養を望む患者とその家族を支える機能を担う。ここで研修医たちは命の現場を肌で知ることになる。「生命の誕生から最期の瞬間までを受け持つのが家庭医。ここは“看取りを”取り入れた、人の一生にふれることができる施設なのです」。小嶋医師は、全国的に珍しい意欲的な試み、と話す。

新施設の愛称は、アイヌ語で桜を意味する「かりんば」。地方医療に貢献する家庭医育成という夢が花開こうとしている。

手稲渓仁会病院  
手稲家庭医療クリニック 院長  
**小嶋 一**  
KOJIMA HAJIME



# この道をひらく。

そこに在る  
プロフェッショナル  
マインド

30年  
年のあゆみ

組織  
一覧

この道をひらく

わたしたちのCSR

ステークホルダーとの対話

環境報告

トップメッセージ

研修医の朝は早い。午前6時過ぎに病院へ向かい、カルテチェックやベッドサイドでの診察を済ませると、毎朝行われる症例検討会に出席。その後は、診察やカンファレンス、治療方針の説明や勉強会などが夜まで続く。

手稲渓仁会病院の臨床研修部は、充実した教育内容や指導体制が人気を呼び、研修を希望する医学生が全国から集まつくる。高い倍率をクリアし、2008年からトレーニングを受けているのが高橋利佳研修医だ。

医師をめざしたのは、人を手助けしたい、という漠然とした思いからだった。やがてマザーテレサの活動に感化され、医療過疎地での貢献を志すようになる。「医療の不足している場所があるなら、そこで私も身を捧げたい」と考えるようになりました」

研修先に手稲渓仁会病院を希望したのは、先進的とされる北米方式の3年制研修システムや、1年次から3年次までが一体となって研修を進め屋根瓦式教育などに魅力を感じたためだが、

決め手となったのは家庭医療コースが新設されたことだった。「将来のロールモデルとなる先生がいました。アメリカでトレーニングを積んだ先生から、マンツーマン指導を受けられることに惹かされました」

地域に根ざす家庭医が理想ではあったが、進路に迷いがなかったわけではない。最初から家庭医をめざすべきか、それとも専門医としての経験を経るべきか。悩んだ末、初志貫徹することを選んだ。「ちょうど家庭医療コースが新設されたのも必然だったのだろうと。家庭医はまだ日本では浸透していませんが、これからはこうした流れも増えるはず。道無き道を進むのは不安な反面、楽しみもあります」と、たくましい一面を見せる。

臨床では思わぬ失敗や苦労もあるが、回復した患者さんの明るい笑顔に励まされる。そこにあるのは「とことん人が好き」という前向きな情熱だ。ひたむきに前進する姿には、地域医療の未来を担う力が秘められている。

**地域から信頼される家庭医をめざして。  
臨床での経験一つ一つが、私を成長させる。**

手稲渓仁会病院 臨床研修部

**高橋 利佳**  
TAKAHASHI RINKA



## 数少ないフライトナースとして命の現場に臨む。 求められるのは一瞬の判断力と相手を思う心。

一刻一秒を争う救命救急の世界では、迅速な処置が命を左右する。しかし北海道のような広大なエリアでは搬送時間が長くなることも多い。これを解決する一策としてドクターヘリの導入が進められている。ヘリには医師とフライトナースと呼ばれる看護師が同乗し、現場や機内で速やかに処置にあたる。病院搬送前の救命処置にかかるため、フライトナースは救命救急での豊富な経験と柔軟な対応力が求められる、いわば救急看護の第一人者だ。

手稲済仁会病院では2002年からドクターヘリの研究運航を重ね、2005年に正式運航を開始。鈴木裕子看護師は2004年からフライトナースとして活動してきた。人気の高い専門職だが、「救命救急に長くかかわっていましたが、やりがいや達成感があり、とても充実していました。そのためフライトナースに欠員が出たときも、あえてなりたいとは思いませんでした」。周囲のすすめを一度は断ったが、救命救急の延長線上にあるものなら経験すべきではないか、と思い直した。

フライトナースは、患者へのケア、家族とのコミュニケーション、救急隊や消防隊、搬送先の病院や医師らとの連携を一人で行う。出動要請があればすぐに飛び出せるように、物品管理も欠かせない。「自分はどう動くべきか」。悩んだりもした。そのときに支えとなったのが、「看護の質を落としてはならない」という強い意思だった。自主的な勉強以外にもフライトナース会で情報共有を図り、スキルアップをめざした。また航空医療学会にも参加し、多くのことを吸収してきた。

今年から、旭川市と釧路市でもドクターヘリの運航が開始された。「北海道のフライトナースの質を高めるためにも、連携してノウハウを伝えたい」。フライトナースを志す後輩たちも多い。自分がチャンスをもらったのと同じように、そして次の人才培养のためにも、世代交代が必要だと思っている。そのときまでは、命の現場に情熱を注ぐ日々が続く。

手稲済仁会病院 看護部 救命救急センター

**鈴木 裕子**  
SUZUKI HIROKO



## この**道**を ひらく。

そこに在る  
プロフェッショナル  
マインド





**「明日はきっと変えられる」という信念。  
仲間とともに、時代に応える看護を創造する。**

医療法人済仁会法人本部 看護統括部長  
手稲済仁会病院 看護部部長

**樋口 春美**  
HIGUCHI HARUMI

小柄な体に柔軟な語り口。2009年4月から医療法人済仁会の看護部門を統括する樋口春美看護統括部長は、そのやさしい物腰からは想像できないほど、強い信念と行動力を持つ。

入職は手稲済仁会病院が開院した翌年のこと。それまでの他院でのキャリアから、リーダーとしての役割を期待されての採用だった。「その頃はまだ院内体制が確立されておらず、一つ一つ手探りでつくりあげていきました」と振り返る。苦労はあったが、スタッフの誰もが新しい病院づくりに夢を持っていた。「明日はきっと変えられる」。そんな思いを共有しながら、目標に向かって誠実に努力を続けた。そうした院内風土は、今も変わらずに引き継がれているという。

その後、西円山病院に異動となり、高齢者看護について一から学んだことで「急性期でも慢性期でも、管理の本質は変わらない」と気づいた。そして「看護と管理について深く学びたい」という思いが強くなり、大学院に進学。2006年に認定看護管理者資格を取得した。「チャレンジャー

でありたい」と話す通り、自らに課したスキルアップへの挑戦だった。

看護統括部長という重責も、看護の知識や技術面だけでなく、人をつなぐ役割も果たせるなら、と引き受けたが気負いはない。仲間たちと力を合わせながら、新たな目標に取り組んできた。その一つが、専門的なスキルを交換し、互いに学び合うことを目的に始まった、手稲済仁会病院と西円山病院の認定看護師の人材交流だ。「人がもっと動けるような環境にしたい。道が太くなれば、組織全体の活性化や、サービス向上にもつながるはずです」

看護現場の荒波を乗り切る支えとなっているもの。それは「まだできることがある」というプラス思考だ。どんな難題でも必ず光が見えてくる、と信じている。「たくましく柔軟に優しさをもって、社会のニーズに応える看護が目標。時代の変化をチャンスにして、看護師としてできることを切りひらいていきたいですね」

**この**道**を  
ひらく。**

そこに在る  
プロフェッショナル  
マインド

# この道を ひらく。

そこに在る  
プロフェッショナル  
マインド



手稲渓仁会病院の薬剤部は、全病棟への専任薬剤師の配置や、注射薬の無菌混合など、幅広い活動を展開しているのが特徴だ。副部長を務める矢萩秀人薬剤師は、19年前に入職。現在は、薬品管理、製剤、注射薬調剤の3セクションをまとめながら、後輩の指導や注射薬の混注業務にあたっている。

開院時からのコンセプトは、「薬が使われる現場やその流通過程には、必ず薬剤師がかかわる」ことだ。これによって、薬剤師は積極的に臨床現場にも携わり、活動のフィールドを広げてきた。「医療事故を防ぐための安全管理システムにも、最初から薬剤師の存在が組み込まれていました。現在では限りなくミスを防ぐ体制が構築されています」

通常、注射薬の混注は、看護師が医師の指示を受けて行うが、忙しい看護業務のなかでの作業にはリスクが伴なう。それを薬剤師が行うことで、安全かつ確実に注射薬を提供しよう、というのが手稲渓仁会病院の考え方だ。1998年には、薬剤部門を1フロアに集約し、混注業務専用の広いクリーンルームを設けたことで、機能はさらに強化された。

「精度を高めて信頼を得る。実績を積み重ねて、



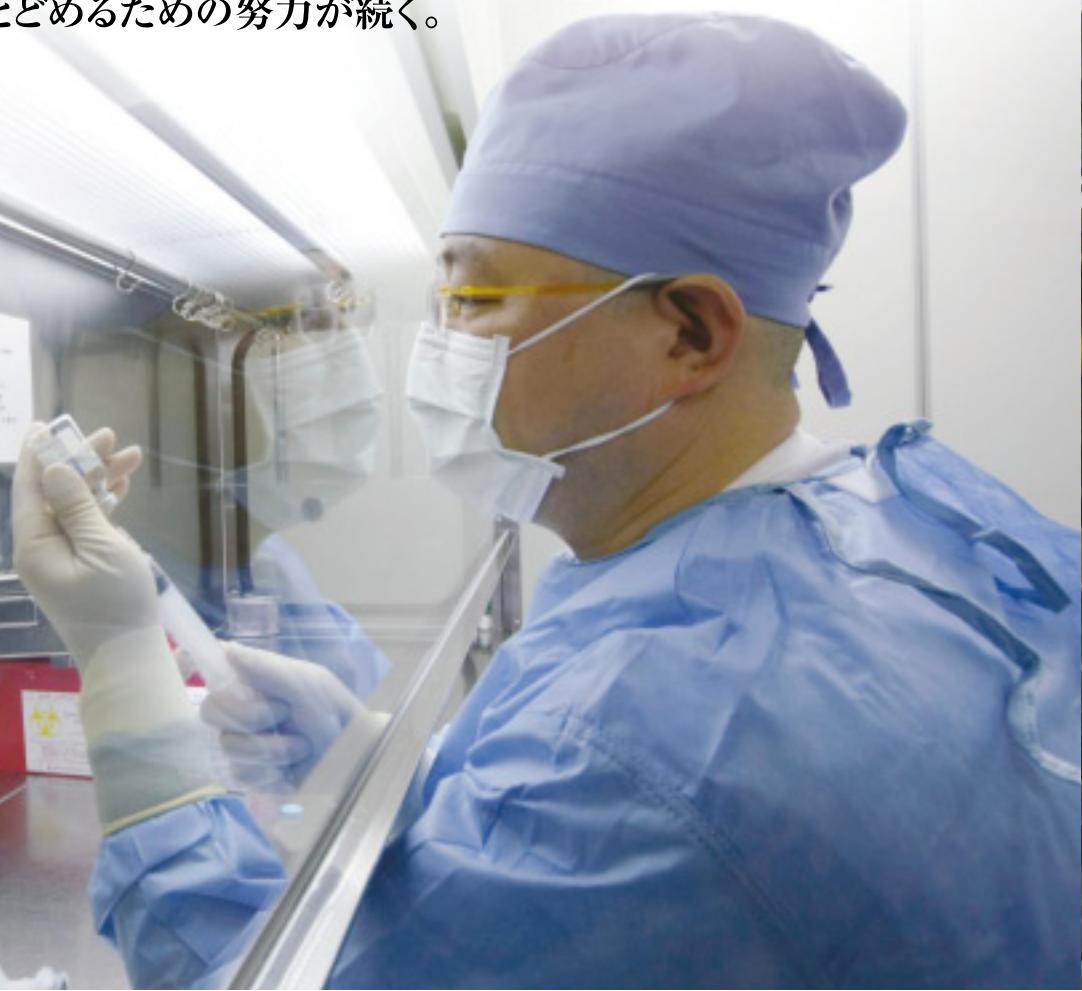
自分たちの存在をアピールする。そのための努力は、誰も惜しません」。すべての薬剤業務に対する責任を持つため、50名ほどのスタッフが、交替で当直や休日勤務もこなす。「みんなには苦労をかけている」と思うが、業務の拡張とマンパワーへの負担は表裏一体だ。そのことを薬剤部全体が理解し、それぞれが高い目的を持って業務に臨んでいる。

課題もある。例えば、外来患者への化学療法についても、モニタリングやバイタルサインのチェックなどを薬剤師が行う体制にしたいが、マンパワーが足りない。また自分自身も、新たな資格取得に挑戦すべきだが、今の業務を極めたいという思いもある。「現場にしがみついてしまっている」と締めくくった笑顔に、仕事への深い愛情と誇りがにじんだ。

**薬剤が使われる現場にはすべて携わるという理念。  
リスクを最小限にとどめるための努力が続く。**

手稲渓仁会病院 薬剤部副部長

**矢萩 秀人**  
YAHAGI HIDETO



# この道をひらく。

そこにある  
プロフェッショナル  
マインド

30年のあるみ

組織一覧

この道をひらく

わたしたちのCSR

ステークホルダーとの対話

環境報告

トップページ

急性期医療では、より正確でスピーディな検査データの提供が必要とされる。手稲済仁会病院は、高度な生理検査や病理検査、細菌検査など、充実した臨床検査部門を擁し、また道内3番目の血液製剤取扱量を誇る輸血検査や検体検査を24時間体制で実施。さらに、最先端医療にかかる研究も重視するなど、専門医療と連動した検査体制を築いている。

臨床検査部のリーダーである男澤千啓部長は、手稲済仁会病院が開院して2年後の1989年に入職した。それまで培ってきた、細菌検査分野での経験を買われてのことだった。「当時の日本は、アメリカなどに比べ、院内感染対策が立ち遅れています。手稲済仁会病院は、かなり早い段階でこの問題に取り組み始め、私は対策チームの一員として感染ルート撲滅に向けた活動に乗り出しました」

その頃は、メチシリン耐性黄色ブドウ球菌(MRSA)などが徐々に出現し始める一方、結核患者が減少していた時代でもあり、職員の院内感染への関心も低かった。職員一人ひとりの自覚を促すため、啓発活動も重要なテーマとなった。

「大切なのは継続すること。例えば、病院環境の見直しなど、各スタッフが身近で負担なく、毎日できることを提倡しました」。地道な努力が結実し、現在は感染制御チーム( ICT )と看護チームとの連携した対策システムが確立されている。

高精度な検査体制を守るために、若手の育成にも熱心に取り組む。経験の浅い技師たちは、積極的に道内・市内での学会や講演会に参加させ、見識を積ませている。また、3年目以降になると道外での学会などに参加させ、全国・世界レベルでのスキルアップをめざす。自分たちの検査技術がどのレベルにあるのかを、より広い観点から認識してもらうためだ。

自身は、専門領域である細菌分野の研究に力を注ぐ。免疫療法に使われる細胞の培養や自己血液成分アフェレシスと臨床応用の推進など、他の医療機関を一步リードする。「この病院には、やりたいことを実現させてくれる環境がある。スタッフもそれに応えようという意識が高い」。うちの検査部はかなりイケてる、という言葉がチームとしての結束力の強さを物語っていた。

## 細菌検査分野におけるプロフェッショナリズムで院内感染の撲滅と最先端医療への貢献をめざす。

手稲済仁会病院 臨床検査部部長  
**男澤 千啓**  
OTOKOZAWA CHIHARU



# この道をひらく。

そこに在る  
プロフェッショナル  
マインド

30年のあゆみ

組織一覧

この道をひらく

わたしたちのCSR

ステークホルダーとの対話

環境報告

トップメッセージ

2006年に設けられた札幌西円山病院訪問リハビリテーション科には、現在2名の言語聴覚士が勤務している。摂食嚥下障害、失語症など、退院後の生活に問題を抱える在宅患者のため、皆上寛子言語聴覚士は日々車を走らせる。

人と接し、人に役立つ仕事をしたい。その思いから医療の世界に興味を持ち、中でもコミュニケーションと食事という生活に欠かせない機能を支える言語聴覚士に魅力を感じた。札幌西円山病院に入職し、約3年間の病棟業務を経て、2007年から訪問リハビリテーション科へ異動した。

業務は病棟勤務の頃と変わり、戸惑いはあった。入院のリハビリでは在宅復帰が目標でも、治療が優先される。一方、訪問リハビリは利用者の生活が中心であり、その中に治療やリハビリが

入っていく。それぞれの生活スタイルや考えを持つ。信頼関係が何よりも重要ということに気付いた。「正しいこと、専門的なことでも、伝え方を考えないと受け入れてもらえません。一方的にご家族のやっていることを否定してしまうことは、信頼関係をつくる上であり良いことではありません」

だから、とにかくご利用者、ご家族と話をして、どこにフォローが必要なのかを見極める。「患者さんやご家族に心地いいと感じてもらえるように、明るい雰囲気作りを心掛けます。ご家族と問題点を共有できた時が、指導内容を説明するチャンスです」。訪問時間の中で相談されたことは、結論を出せず持ち帰ることはあっても、必ず何らかの方針を示し、話をまとめる力が必要となる。「専門性だけでなく、人間力を期待されています」

訪問リハビリテーションを担当する言語聴覚士の存在は、広く認知されているとは言い難い。「退院時にすぐ引き継げるのが理想なのですが、まだそういうケースは少ないですね。どうして、もっと早く力になれなかつたのだろうと思うこともあります」。地域のケアマネジャーとの連携も含め、もっと頼られる存在にならなければ力が入る。



## 居住空間に訪問してのリハビリは、専門性に加えて“人間力”を試される。

札幌西円山病院 訪問リハビリテーション科 言語聴覚士

皆上 寛子

MINAKAMI HIROKO



札幌西円山病院では2004年から病棟への介護福祉士の本格的配置を始めた。療養病棟に入院する患者さんたちのQOLを上昇させるためには、福祉のエキスパートである介護福祉士が、ケアプランの作成から関わることを期待されている。

現場を支える若手のひとり、浜崎志野介護福祉士がこの仕事を選んだ理由は「おじいちゃん・おばあちゃん子だったので」。高齢者とふれあい、生活の手助けをしたいと思っていたが、福祉施設での実習を経験するうちに、さまざまな医療職種との連携のもと、患者さんの治療とケアを行う病棟勤務に強い魅力を感じた。

## 患者さんの生活に寄り添う立場から、質の高いケアの実現を後押しする。

札幌西円山病院 3B病棟 介護福祉士

**浜崎 志野**

HAMAZAKI SHINO



看護師やリハスタッフと共に業務に臨むと、医療の知識の必要性を感じさせられることは多い。処置を見る機会も多く、毎日が勉強だと感じる。しかし同時に、生活を援助する介護スタッフならではの見守り、目配りの視点がなくてはならないことも感じている。「患者さんの朝から晩までの行動や状態を把握できるので、限られた時間の中での関わりになるリハスタッフさんなど、他の職種の方に伝えられることは多いんです」。看護師やリハスタッフとは、申し送りだけでなく日常的に気付いたことをすぐ話し合うようにしている。

とはいっても、介護の現場の深刻な人手不足は、病棟も例外ではない。業務に追われ一人ひとりの患者さんとの関わりを満足いくまで持てず、少ない人数で夜勤を行うことを重圧に感じることもある。もっとも辛いのは、患者さんの死に立ち会うことだ。「絶対に慣れたりしないぞと思います」

だが、そういう時には介護という仕事が持つ喜びが支えてくれる。「患者さんが私に心を開いて“志野ちゃん”と名前で呼んでくれるときが一番うれしいですね。お礼を言われるよりも、自分の存在をきちんと覚えてくれたんだということが」。限られた時間でも、患者さんに毎日できるだけ思い出深く過ごしてもらえるよう、笑顔を絶やさず仕事をすることが彼女の信念だ。

この道を  
ひらく。

そこに在る  
プロフェッショナル  
マインド

白石区の住宅街にある「菊水こまちの郷」は、入居定員29名の地域密着型介護老人福祉施設と、通所中心の小規模多機能型居宅介護が併設された、新しいタイプの特別養護老人ホームだ。2007年の開所以来、家庭的な雰囲気と細かなケアが人気を集めている。

「おはようございます」と明るい声で、挨拶して回る女性がいる。小泉静江介護主任は、ケアワーカーたちをまとめながら、自らも現場に立つ。温かな笑顔に、さりげない気づかい。20年以上にわたる介護職員としてのキャリアに裏打ちされた包容力を感じさせる。

福祉の世界に入ったのは、軽い気持ちからだった。「20代後半で接客業を辞めた後、西円山敬樹園に勤めていた知り合いからアルバイトに誘われ、短期間なら、と気軽に引き受けました。介護の経験はゼロ。先輩職員に介助方法を一から教えてもらいました」。初めて経験することばかりだったが辛いとは思わず、人と接する仕事が楽しかった。

その後コミュニティホーム白石の開所にあわせて異動し、それから18年間、介護老人保健施設で働くことになる。その頃はまだ経験が浅く、仕事は日々の業務を重ねながら学んでいった。忙しかったが、利用者さんの笑顔や家族とのかかわりに小さな喜びを見つけることができた。「それができたのは、私がこの仕事に向いていたからなのかもしれません」。後輩を指導する立場になったこともあり、7年前には介護福祉士の国家資格を取得した。明確な根拠に基づく介護の必要性を感じたためだった。

「菊水こまちの郷」は小規模のため、利用者とじっくりかかわるのが魅力だ。今は少数のスタッフと心のこもったケアをめざす。小さい施設だからできるサービスがある、と考えている。「この施設は“終の棲家”。長い人生を生きてきた方それぞれの思いを大切にしながら、家族のように見守っていけたら。そのことを、若いスタッフたちにも伝えていくのが、私の役目だと思います」



**お年寄りとのかかわりで見つけた喜びが原動力に。  
「心」でケアすることのすばらしさを伝えたい。**

社会福祉法人渓仁会 菊水こまちの郷介護主任  
**小泉 静江**  
KOIZUMI SHIZUE



## この道をひらく。

そこに在る  
プロフェッショナル  
マインド

# この道をひらく。

そこに在る  
プロフェッショナル  
マインド

栄養の知識は、病気を予防するためにある。  
信念のもと、生活支援から北海道民の健康増進を目指す。

医療費の高騰を受け、“予防医学”が重要な課題となった。渓仁会円山クリニックは健診という検査・診断を行う一方、生活習慣改善のための栄養相談をしている。その数は年間2,000件に及ぶ。さらに2008年には特定健診・特定保健指導が導入され、管理栄養士の役割は増すばかりだ。

栄養指導科の佐藤きぬ子主任は、早くから予防の重要性を訴えてきた一人だ。手稲渓仁会病院の立ち上げから12年間勤めた。

だが、入院中は栄養指導に従っても、退院後まで続かず、また健康を損ねて病院に戻ってしまう人がいる。「病気になってからの栄養指導でいいのか」。その疑問が佐藤主任を、栄養士の業務拡大をめざす渓仁会円山クリニックへと動かした。

予防としての栄養相談に携わって気付いたのが、「病んでいない人は“指導”を求めてはいない」ということだった。クリニックの栄養相談に来る人は健康への意識が高いが、特定保健指導に来る人の中には、“嫌々来る”という人もいる。だから、気付きを促し、自分で解決する力を養うことが目的となる。決められた時間の中で伝える

ためには、カウンセリングやコーチングといった、伝える側の技術向上も求められる。「短い時間で結果を出そうとはせず、生活を振り返り、これがよくない状態であることを気付き、自ら改善しようと思っていただく。それが特定保健指導だと思う。指導ではなく、支援ですね」

クリニックを訪れる人だけでなく、自治体などの求めに応じ、管理栄養士がいない地方の指導のために全道を駆けめぐる。多忙な毎日が続くが、「継続しないと信頼関係が築けませんから。くりかえすことが大切です」と平然と言い放つ。健診で異常な数値が出て、治療が必要かどうかの瀬戸際にいる人を、生活支援・健康増進活動によって、要治療になるのをできるだけ防いでいくのが、渓仁会円山クリニックの求められる姿だと佐藤主任は信じている。「さらに外来からも積極的に予防を進めてほしい。そのためにクリニックの専門外来がもっと機能して欲しい。できるだけサポートしていきたい、そういう思いで一杯です」。一歩ずつであるが、確かな歩みが、地域全体の健康を守ることに繋がっていく。



渓仁会円山クリニック  
保健事業部 栄養指導科主任  
**佐藤 きぬ子**  
SATO KINUOKO



# この道をひらく。

そこに在る  
プロフェッショナル  
マインド

渓仁会グループの最初の医療機関として、西円山病院が誕生したのが1979年。それから30年間にわたり、事務スタッフとして病院の運営に尽力してきた人物がいる。現在、手稲渓仁会病院の経営管理部を統括する堀公明部長は、組織の草創期から今までの歴史を知る、渓仁会グループでも数少ない職員だ。

西円山病院では、立ち上げの準備からかかり、8年間で3度の増築・増床を経験した。ベッド数は146床から947床にまで増え、まさに「事業の拡大期」に立ち会った。

高齢者慢性期医療の次に渓仁会グループがめざしたのは、高度な急性期医療だった。手稲渓仁会病院の開設準備室に異動となったことで、まったく機能が異なる急性期病院について一から学ぶことになる。どういう病院が評価され、医療が求められているのか。当時、医療の質の向上や経営改善に積極的だった民間病院を手本に、自分たちが理想とする病院像を思い描いた。「始

めから500床を持つ総合病院というのは稀で、周囲からは“無謀な実験”と言われました」と振り返るように、確かにしばらくは経営的に困難な時代が続いた。しかし、「いつか社会から評価される病院になる」という確信があったという。

巨大な病院の立ち上げにかかり、その成長とともに歩み続けてきたが、「経営管理の責任者としては失格かもしれない」と笑う。「採算を最優先するのではなく、まず病院としてやりたいことが先にあり、次にそれを実現するための人材やインフラについて考えます。採算を考えるのは最後。それを許してくれた渓仁会という組織にとても感謝しています」。その言葉を裏付けるように、どのスタッフも「この病院にはやりたいことを実現させてくれる風土がある」と口を揃える。

将来は、手稲渓仁会病院を日本の急性期医療をリードする存在に、という大きな夢がある。そしてこの病院にはそれを実現するだけの可能性が必ずある、と信じている。

渓仁会の歴史とともに歩み続けた30年間。  
ゴールなき道の先に、日本をリードする医療がある。

手稲渓仁会病院 経営管理部部長

堀 公明  
HORI KIMIAKI



札幌の奥座敷と呼ばれる定山渓地区。温泉街の一角にたつ定山渓病院の職員たちにとって、重要な足となっているのが送迎バスだ。サプライサービス課に所属する加藤克廣運転士は、この道26年の大ベテラン。しかもその間、無事故無違反という、まさに運転士の鏡ともいえるキャリアを誇る。

加藤運転士が定山渓病院に入職したのが1984年。もともとは東北地方でトラックや重機のドライバーをしていたが、趣味のフライフィッシングの本場である北海道への憧れから、北の大地で働くことを志した。畠違いの分野からの転職だったが「違和感なく、斯く雰囲気になじみました。人とかかわることが好きだからでしょうか」と当時を思い出す。以来、送迎バスの運転や冬期間の除雪など、病院のサービス向上に努めてきた。

バスの運転士は、病院の「顔」としての役割も持つ。職員はもちろんだが、時には見舞いに訪れる人や患者さんとふれあうこともある。さりげなく、しかし注意深く人々を観察し、乗降の際などには先回りして手を差し出す。「乗る人の安全を守ることが何より。気持ちよくバスに乗っていただくた

めにも、安全の確認とコミュニケーションには気をつかいます」。この仕事はサービス業、自分とのふれあいが病院の入口になるので、そこで信頼感を持ってもらうことが職務、と強調する。

溪仁会グループがめざす理念も理解している。求められるサービスの質が、この26年間で大きく変化してきたことも感じる。しかし、誠実に自分の仕事を果たす、という姿勢に変わりはない。「あくまでも自分は自然体。皆さんからの“ありがとう”という言葉や笑顔のために努力するだけです」

休日、尻別川で自慢のフライロッドを振ることがリフレッシュになっている。「川に恵まれた環境と、人とのふれあいがある職場。これが若さを保つ秘訣です」。仕事への誇りを胸に、今日も安全運行でバスを走らせる。

## この**道**を ひらく。

そこに在る  
プロフェッショナル  
マインド

いつの時代も愛されるサービスを心に、  
“自然体”で、人々の笑顔を運ぶ。

定山渓病院 サプライサービス課  
**加藤 克廣**  
KATOH KATSUHIRO



# 先輩からのメッセージ

渓仁会グループとともに長年歩んできた職員や、かつて渓仁会グループで活躍したOBの方々に、心に残るエピソード、渓仁会グループへの思い、未来に期待することなどをうかがいました。



NPO法人シーズネット  
代表  
**岩見 太市さん**

## 健康と高齢期の生き方をケアする高齢者医療を実現してほしい

私が西円山病院に勤め始めたのは昭和61年のことでした。当時、東京で加藤隆正初代理事長にお会いしてお誘いをいただき、もともと北海道という土地に憧れがあったこともあり、移住を決めました。

西円山病院では最初に、地域活動を担当しました。当時は療養型の病院が増え始めたころで、西円山病院も新棟完成を控え、地域とのつながりが課題でした。ボランティアグループ「銀の舟」の活性化や、現在のサラネットにつながる広報誌「健康なかま」を創刊し、地域の方々に病院の活動をご理解いただくよう努めました。やがて成果が認められ、次に渓仁会グループ内の各病院に患者人数に応じてソーシャルワーカーを配置し、グループ内での連携を取る総元締めとしての役割を任せいただきました。

札幌に来たころは知り合いがなく、地域の老

**OBの方々から**

人クラブや民生委員に飛び込みで会って、地域のネットワークを広げました。知り合いができるまでの寂しい気持ちと、仕事のご縁でできた人脈が、現在高齢者のネットワークをつくる活動を始めるきっかけとなりました。在籍当時一緒に仕事をしていたソーシャルワーカーの方々から、高齢者医療の情報をいただけるのも、活動の助けとなっています。

創業30周年を迎えたこと、各地で渓仁会のいい評判を耳にすることは、ともにOBとして誇らしいことです。将来に向けて、高齢者医療の重要性はますます増していますから、病気だけを診るのではなく、暮らしを診る医療を実現してほしいですね。私はシーズネットで「健康な体での生き方づくり」を提唱しています。健康は目的ではなく手段ですから、健康の先の高齢期の生き方を見つめたケアを続けていただきたいと思います。



介護老人保健施設 ゆあみーる  
事務次長  
 **笥岡 新二さん**

## 渓仁会の理念やサービスへの考え方は今も仕事をする上での基本になっています

私は1982年から7年間、渓仁会グループに在職しました。最初は定山渓病院の相談室にソーシャルワーカーとして入職し、6年間勤務した後に、西円山病院に異動となりました。

その頃の定山渓病院には整形外科や循環器科などがあり、一般的外来患者さまも来院されていました。また、西円山病院は今と同様、院内広報誌の発行やボランティアとの連携など、外に開かれた高齢者病院として特色を打ち出していました。在職した7年間で多くのことを学び、医療や福祉に携わる上での基礎を築くことができました。

私が勤務していた当時は、今ほど施設数や

**OBの方々から**

職員数は多くありませんでしたが、病院内での勉強会や研修発表会への参加なども盛んに行われており、誰もが自主的にスキルアップを図ろうという高い意識を持っていました。

現在は、岩見沢市の介護老人保健施設に勤務しています。ボランティアさんにも協力してもらうなど、渓仁会での経験が生かされています。近くにある「コミュニティホーム美唄」は、互いに切磋琢磨する良きライバルです。私たちも利用者さまに喜ばれる施設運営をめざし、福祉サービスの向上に取り組んでいます。



社会福祉法人渓仁会 理事  
事業開発推進室長  
兼 カームヒル西円山施設長  
**菊池 達行**

## 職員それが意思を持った集合体として大きな組織を支えることが未来につながる

私が渓仁会グループに入職したのは、今から22年前。一般企業から定山渓病院の事務職員に、というまったく畠違いからの転職でした。

当時は今ほど組織は大きくなく、社会福祉法人の施設も「西円山敬樹園」のみでした。やがて、1989年に「コミュニティホーム白石」を開設することになり、その立ち上げスタッフとして異動になりました。それからは八雲、美唄、岩内と地方での介護老人保健施設の開設に携わってきました。

思い出されるのは、最初に手がけた「コミュニティホーム白石」のことです。それまで福祉行政のことは何も知らず、また老人保健施設も全国で7つのモデル施設ができたばかりということもあり、手探り状態での開設でした。開設予定日近くになって、ようやく認可が下りたときは、自宅でしみじみと祝い酒を飲んだのを鮮明に覚えています。

## 永年勤続の職員から

今年で創業30年という節目を迎え、組織としてはたいへん喜ばしいことだと感じています。しかし私個人は、秋野理事長が話されているように現在は第二の創業期であり、6年目を迎えたところという意識でいます。

医療や福祉の世界は組織内で完結してしまうことが多い、他にはなかなか目がいかないものです。幸い、渓仁会グループには多くの組織が集まっています。ぜひ、職員の皆さんには同じグループの仲間としての意識を持ち、互いに理解し合う心を持ってほしいと思います。

巨大なグループというだけでは、いつか小回りが効かなくなり、倒れてしまうかもしれません。しかし、職員一人ひとり、組織一つ一つが小さな意思を持つ集合体であるなら、生き残っていくことができるはずです。そうした組織風土があれば、必ず未来につながっていく信じています。



手稻渓仁会病院  
医事課長  
**関谷 公栄子**

## 一致団結して目標に立ち向かう 強い絆とチームワークはずっと変わらない

## 永年勤続の職員から

私は手稻渓仁会病院の開設準備室時代に入職しました。病院の建物が完成したときには、その大きさにびっくりしたことを覚えています。

実は1987年12月の開院当日に外来患者さんは68人、次の日はたった17人しか来院されませんでした。今では1日あたり1500人にも上ることと比べると、想像もできない話です。それでもスタッフは対応に必死で、「このままどうなるんだろう」と不安になりましたが、1週間ほどでスムーズに回転し始めました。

手稻渓仁会病院は開院以来、常に新しいことに取り組んできました。電子カルテの導入や手稻渓仁会クリニックの開院、救命救急棟の

開設などがあるたびに、現場は大騒ぎになるのですが、不思議なことに必ず1週間すると自然に落ち着くのです。これは、何か目標や課題があるときには、すべての職種が団結して解決にあたるという、渓仁会ならではの特徴だと思います。「患者さまのために何とかしよう」という思いを、みんなが共有しているからではないでしょうか。

渓仁会というのは、働く者にとっても、地域の人たちにとっても信頼できる組織だと思います。グループがいくら大きくなても、こうした良さは失われないと感じています。